

この企画書は2006年5月現在のものであり、トルコ班の中止や沖縄班の新設、
班員構成や活動内容の変更などは反映されておられませんので、ご了承下さい。

九州大学医学部熱帯医学研究会

第41期 活動企画書

2006

Academic Society of Tropical Medicine

Kyushu University

第41期 活動企画書

目次

会長あいさつ

信友 浩一 九州大学大学院医療システム学教室 教授

総務あいさつ

松木 孝之 九州大学医学部医学科5年

【海外研修班】

中国班

タイ班

インド班

トルコ班

会長あいさつ

昨年と同様に、国外に 4 箇所の活動フィールドを設定したが、そのうちの二つは新たな活動目的を目指している。ひとつは、トルコでの難民キャンプを訪ね医療活動の一端を担ってくるものであり、もうひとつは、中国での移植医療の最先端を見てくるものである。いずれのフィールドも活動目的も今までに無い発想の活動であり、現代医学生の知的関心の生々しさを感じる活動であり、どのような知的衝撃を受けてくるか、楽しみにしているところである。帰国後の活動報告作りで相当な厚みのある議論が予想されるが、是非、その重みに耐えて見識ある報告を期待したい。

残るふたつの活動は、熱帯医学研究会が継続的に取り組んでいるインドのマザーテレサの「死を待つ人の家」でのボランティア活動と、タイの HIV 対策最前線で成功例を見てくる活動である。いずれの活動も帰国後の、同地を訪問した先輩方との、報告会での対話が楽しい活動である。このふたつの活動は着実に会員の見識を高めていけるものであると頼もしく感じている。

今年も、会員学生が文化風土が違うところでの医療を体感・実感してくることで大きく化け、且つ、無事に戻ってくることを念じています。そのような学生に対し、今年も適切な助言と、一層のご支援のほどを皆様方をお願いする次第です。ご高配のほどよろしく重ねてお願い申し上げます。

熱帯医学研究会 会長
九州大学医療システム学教室 教授
信友 浩一

総務あいさつ

第40期活動報告書の総務あいさつには部員不足による「部の存続の危機」と書きましたが、幸いにも本年度は医学科より6名、保健学科より4名の新生が熱研に入部してくれました。熱研という部活のおもしろさが、少しずつではありますが周囲に浸透しつつあると実感できます。これまでの先輩方が積み上げられてこられた実績によるところが大きいと思いますが、現状に甘んじることなく現役部員の私達が一丸となってさらに努力をしていく所存であります。

今年度はインド、タイ、中国、トルコの4つの海外班を企画立案させて頂きました。それぞれが充実した活動を行うことはもちろん、これからの熱研を担う新生に貴重な体験をしてもらえるようアレンジしていこうと考えています。

最後になりましたが、本年度もこれまでと同様に御指導、御支援のほどよろしく願いいたします。

九州大学医学部熱帯医学研究会 総務
九州大学医学部医学科5年
松木 孝之

中国班

活動目的：中国における移植医療の実際を見学する。

活動場所：北京など

活動期間：8月中の1～2週間

班員：松木 孝之(九州大学医学部5年) 班長

現在班員を募集しています。

活動に当たっての抱負

中国では1980年代に臓器移植に関する法律が制定されてから、政府・関係各省が積極的に臓器提供をするよう後押しています。その結果中国では5万例以上の臓器移植が行われるようになってきました。これはアメリカについて世界で2番目の症例数です。外国人に対しても門戸を開いており、日本からも年間数十人が移植の機会を求めて渡航しているようです。移植医療がなかなか進まない日本とこのような中国の背景の違いを実際に見て比較できたらと思い、この班を立ち上げることとしました。臓器がどのようにレシピエントに分配されているか、政府の政策以外にここまで移植医療が浸透した理由は何なのかなどを勉強できたらいいと考えています。

タイ班

活動目的：日本の HIV 患者数は増加傾向をとりつづけている。アジアで唯一の HIV 対策に成功している国としてあげられるタイの政策を実際に見ることで日本の今後の HIV 対策を考えていきたい。

活動場所：タイ、周辺諸国（未定）

活動期間：8月上旬から8月末日

班員：船田大輔（医学科4年）班長
座光寺正裕（医学科4年）

活動にあたっての抱負

HIV/AIDS を通じて日本と東南アジア諸国のあり方について考えていきます。新入生が参加してもいいように勉強会を出発前に行いたいと思います。もちろんベテラン部員の班員も募集中です。

インド班

活動目的：インドに五十年前からあるマザーテレサの「死を待つ人の家」において、患者さんの身の回りの世話や治療の手伝いといったボランティア活動に参加する。単に奉仕活動に参加するだけでなく、医療を学ぶ学生として、一人の人間として、人命の尊さを直接感じとりながら学べる機会にしたい。

活動場所：インド・コルカタ

活動期間：8月中旬～約2週間

班員：坂本 宗八 (九州大学医学部保健学科3年) 班長
栗山 由貴子 (九州大学医学部保健学科3年)
藤山 啓美 (九州大学医学部保健学科3年)
穴井 裕子 (九州大学医学部保健学科3年)

活動に当たっての抱負

貧困・病の苦しみ・死の恐怖を抱えた人を前に、私たち学生ができることと言えばその人と時間を共有し、苦しみを理解するよう努めることくらいです。当然のことのようですが、助けを必要としている人のそばにいて「真心を尽くす」ことこそが重要ではないかと思っています。インドの活動ではそのような貴重な体験ができるはずですし、将来医療職者を目指す者としての人間性を養ってきたいと考えています。

インドでは先輩方がこれまで四度に渡って活動されていて、今年もこれを引き継ぎ、意義のある活動ができるようにしたいと思います。今回はスタディツアーとしての側面も持たせ、新入部員に熱研の活動を体験してもらおうという目標もあります。

トルコ班

活動目的:中東およびヨーロッパの境界というトルコの持つ独特な文化的な背景を考慮に入れながら現地の医療を視察する。

アヤスマ難民キャンプのクルド人に対する医療活動を行う。(仮)

活動場所:トルコ

活動期間:7月下旬から8月末日

班員:吉川智子(九州大学医学部4年) 班長

香月真理子(保健学科4年)

活動に当たっての抱負

トルコという国は歴史をひもとけばオスマントルコ帝国までさかのぼる。国としての存在がここまで歴史ある国も少ないのではないだろうか。そしてオスマントルコ帝国以後、ヨーロッパの国からの侵略があり、また一時はモンゴル帝国にもその境界を脅かされた経緯がある。このような歴史のある国の文化が一様であったとは考えにくい。

現在、イスラムの文化圏ではあるが、対外的にはヨーロッパに近い位置をとるトルコという国。親日家が多いと聞くトルコだが、今後その関係はいつそう深くなっていくと考えられる。

トルコ独特な文化の中での医療を見学し、今後の日本との関わりを聞いていきたい。